

東京都写真美術館コレクション展

機械の眼 カメラとレンズ

The Eye of the Machine: Camera and Lens

主催：東京都 東京都写真美術館

協賛：凸版印刷株式会社 協力：平凡社

会期：2012年9月22日（土・祝）～11月18日（日）

会場：東京都写真美術館3階展示室

料金：一般 500（400）円／学生 400（320）円／

中高生・65歳以上 250（200）円

※（ ）は20名以上の団体料金 ※東京都写真美術館友の会会員、
小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料

※第3水曜日は65歳以上無料



エドワード・ウェストン ペッパーNo.30
1930年 ゼラチン・シルバー・プリント

展覧会概要

1920～30年代に成立した近代写真の動向は、カメラとレンズそして感光材料がもつ「機械性」に拠って、多彩な表現を展開しました。それは写真でしかできない表現を目指したといえることができます。

大型カメラを使いレンズの精密な描写力を追求したエドワード・ウェストン、ライカ・カメラを「眼の延長」として駆使して、揺れ動く現実の瞬間を切り取ったアンリ・カルティエ＝ブレッソンや木村伊兵衛、望遠レンズや広角レンズの視覚をカメラがもたらすもう一つの現実としてとらえ、特異なイメージを駆使した表現、極端なアングルや長時間露光、ブレの効果、顕微鏡や望遠鏡の視覚、パン・フォーカスとディファレンシャル・フォーカスなどカメラとレンズによってもたらされる視覚世界は、人間の眼とは似て「非」なるものです。

カメラとレンズは、写真のはじまりの時代でもデジタル時代の今日においてもその基本に変わりはありません。本展では19世紀から現代に至る「カメラ」という視覚装置ならではの多彩な表現を、コレクション作品と資料から紹介。時代を超えて写真表現の可能性が何によって支えられているのか、カメラを持っていることが人間にどのような可能性をもたらすのかを探求します。

現在のカメラのルーツ「カメラ・オブスクラ」

紀元前、ギリシャのアリストテレスが、日食の時の太陽が木の葉の隙間を通る光線により三日月形に投影されることを発見します。この光学現象は世界中の科学者によって研究され、のちにピンホールの下にレンズを装着するようになり、視覚装置として発展していきます。そして、ルネサンスを経て、「カメラ・オブスクラ（暗い部屋の意味）」という概念が確立し、画家たちが完璧な一点透視図を描くための装置として利用します。19世紀に入ると、このカメラ・オブスクラの映像を固定する技術が追究され、1827年にフランスのジョセフ・ニセフォール・ニエプスが約8時間の露光をかけて、自分の屋敷の鳩小屋の撮影に成功します。そして、1839年、ルイ・ジャック・マンデ・ダゲールによってダゲレオタイプ（銀板写真）が発表されます。持ち運び可能な「カメラ」に発展したカメラ・オブスクラによる、本格的な写真術の時代が始まるのです。

主な展示構成と見どころ

21 世紀になり、デジタル映像技術の確立によって新たな時代を切り開いている「写真」であっても、それがカメラとレンズ、つまりカメラ・オブスクラという視覚装置に支えられていることに変わりはありません。本展では、19 世紀から現代までのさまざまな写真作品から、カメラとレンズの発達、そして、それによって写真家たちが切り拓いてきた表現をご紹介します。

シャープ・フォーカスとソフト・フォーカス

私たちが写真を鑑賞するとき、きりきりと対象を即物的、客観的に精密に描写する表現も、曖昧模糊とした情緒的、主観的な表現も、「レンズ」という機械の眼による描写でしかないことに気づくでしょう。近代的写真表現にとって、絵画の模倣によって芸術性を保証しようとしたピクトリアリズムの芸術写真に打ち克つためには、レンズの描写力を追求することが大変重要でした。



植田正治 「白い風」より 1981 年 発色現像方式印画

パン・フォーカスとディファレンシャル・フォーカス

レンズは必ずある一点にしか焦点を合わせることができません。しかし、比較的焦点距離の短いレンズを使い、絞りを小さくすることによって被写界深度（擬似的に焦点が合っているように見える範囲）が深まり、遠くから近くまで均一にピントが合っているように見えます。これがパン・フォーカスです。目の前にある現実をすべて等しい価値にとらえる表現であると言え、スナップショットの写真家が多用する技法です。一方、ディファレンシャル・フォーカスは、ピントの合っていない部分はボケてしまうため、ピクトリアリズムの芸術写真の表現に通じています。



レンズの視覚－広角レンズと望遠レンズ

広角レンズで撮った写真は遠近感が強調され、一方、望遠レンズではそれが失われ画像内に事物が積み重なっているように見えます。さまざまな焦点距離のレンズを駆使することによって、視覚のトリックともいえる表現が追究され、見るものを特異な世界へと誘ってくれます。

左) ビル・ブランド イースト・サセックス海岸
1957 年 ゼラチン・シルバー・プリント

カメラ・アングルの解放－俯瞰撮影と仰角撮影

芸術写真家がこだわった人間の眼は、レンズの問題だけではなく人間の身体性のことでもあり、それは対象を正面から歪みなく見えるカメラ・ポジションこそが「正しい」とするものでした。それに対して、近代的写真表現では、写真の機械性を強調しようとして、見上げるアングルや真下を見るアングルを恣意的に選び、新しい視覚を切り開きました。

右) アレクサンドル・ミハイロヴィチ・ロトチェンコ
下から見上げた建物 1925 年 ゼラチン・シルバー・プリント



時間－長時間露光

写真の本質の 1 つには「静止している」ということがあるでしょう。しかし、カメラが向けられる現実にはさまざまな動きに満ち溢れています。20 世紀の写真家たちは、長時間露光によって時間を空間化する表現方法を模索し、写真というもうひとつの現実を創造したといってもよいでしょう

山崎博 ヘリオグラフィ No.3 1978 年
ゼラチン・シルバー・プリント



時間－ブレ

ブレた写真は、長時間露光のように時間の空間化といった意識的なものではなく、偶然の産物です。その偶然の産物を意識的に生み出すことによって、新しい表現を追究する写真家も数多くいます。微妙なブレが被写体の躍動感を表現したり、激しいブレが仮想の現実感を表現したり、写真がもつ不思議な可能性を見るものに感じさせます。



アンリ・カルティエ＝ブレッソン サン・ラザール駅 1932 年 ゼラチン・シルバー・プリント

時間－瞬間

「写真は瞬間の芸術である」という言い方は、もはや使い古されているかもしれませんが、20 世紀の写真表現は、この言葉を抜きに語ることはできません。写真が瞬間を切り取ることは、「人間の眼の延長」といわれた「ライカ」というカメラの出現によって可能になりました。人間のあらゆる感情や行動を写真の世界にもたらし、ヒューマン・インタレストを現実の中に見いだすことになっていきます。

人工光

写真は、光がなくては写すことができません。そのため、十分な光が届かないところでも撮影を可能にするために、歴史的にもさまざまな人工光が工夫されてきています。特に、ストロボの発明は、肉眼の認識を超えた特異な世界へと見る者を誘います。暗闇に潜む社会の現実を暴き、不可視の世界を露わにする人工光は、写真にとっては「第二の太陽」ともいえるでしょう。

未知の世界へ

カメラは人間の眼が及ばない世界も切り取っていきます。天体望遠鏡や顕微鏡と組み合わせたカメラは自然の神秘や驚異をもたらします。また、遠隔装置をつけることで月面の世界までも間近に見ることができます。カメラは、人類の進歩の最先端にいつも存在しているのです。

佐々木崑 カプトガニ 「小さい生命」より 1967 年
銀色素漂白方式印画



特殊効果

ピンホール・カメラや引き伸ばし機のコンデンサー・レンズなどを使ったり、歪曲した鏡面を使ったりして、通常のレンズではできない特殊な世界を創造した表現や、カメラという機械を通常の撮影装置として使わない表現には、写真家がカメラやレンズと純粋に遊ぼうとする無垢な精神が表されているのかもしれませんが。これは、カメラ・オブスクラという視覚装置がもたらした人類の視覚経験を一度解体して、カメラを新たな感覚装置として持ち直そうとする意志が感じられます。

<主な出品作家>

福原路草、エドワード・ウェストン、アンセル・アダムス、熊沢磨二、木村伊兵衛、森山大道、植田正治、ゲリー・ウィノグラッド、鈴木理策、ビル・ブランツ、篠山紀信、三木淳、W・ユージン・スミス、松江泰治、アレクサンドル・ミハイロヴィチ・ロトチェンコ、奈良原一高、山脇巖、山崎博、緑川洋一、佐藤時啓、ウィリアム・クライン、紅谷吉之助、アンリ・カルティエ＝ブレッソン、ウィージー、内藤正敏、佐々木崑、ロバート・シェラー、中村征夫、宮崎学、アンドレ・ケルテス、鈴鹿芳康 ほか

作品とカメラ資料をあわせて約 150 点 を出品予定です。

関連イベント

① ワークショップ「カメラを分解してみたら、何が見えてくるのかな？」

日時：10月7日（日）・8日（月・祝）14：00～17：00 【事前予約制】

場所：1階創作室

講師：井口芳夫（JCII カメラ博物館学芸員）

詳細は館内配布のワークショップ・チラシもしくはホームページ（www.syabi.com）をご覧ください。

② 担当学芸員によるフロアレクチャー

会期中の第2・第4金曜日、16時より担当学芸員による展示解説を行います。

※本展覧会の半券（当日有効）をお持ちの上、3階展示室前にお集まりください。

関連書籍のご案内

「光と影の芸術——写真の表現と技法」

平凡社刊 定価 2,625 円（税込）

本年度、写真における表現と技法をテーマに開催されているコレクション展「光の造形—操作された写真」（7/8 まで開催）、「自然の鉛筆 技法と表現」（7/14-9/17 開催）、「機械の眼 カメラとレンズ」（本展）の各展より、主な出品作品と担当学芸員のテキストを掲載した関連書籍です。東京都写真美術館ミュージアムショップ ナディッフ バイテン（03-3280-3279）にて発売中です。



開催概要

展覧会名 機械の眼 カメラとレンズ（英名：The Eye of the Machine, Camera and Lends）

会 期 2012 年 9 月 22 日（土・祝）～2012 年 11 月 18 日（日）

会 場 東京都写真美術館 3 階展示室

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

ホームページ www.syabi.com 電話 03-3280-0099

主催関係 主催＝東京都 東京都写真美術館／協賛＝凸版印刷株式会社／協力＝平凡社

開館時間 10:00～18:00（木・金は 20:00 まで）※入館は閉館の 30 分前まで

休館日 毎週月曜日（ただし月曜日が祝日の場合は開館し、翌火曜日休館）

観覧料 一般 500（400）円／学生 400（320）円／中高生・65 歳以上 250（200）

※（ ）は 20 名以上団体料金 ※東京都写真美術館友の会会員、小学生以下および

障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第 3 水曜日は 65 歳以上無料

交通機関 JR 恵比寿駅東口より徒歩約 7 分／東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約 10 分

※当館には専用の駐車場がございません。お車でご来館の際は近隣の有料駐車場をご利用ください

お問い合わせ

東京都写真美術館 電話：03(3280)0034 FAX：03(3280)0033

展覧会担当 金子 隆一 r.kaneko@syabi.com

広報担当 久代 明子 a.kushiro@syabi.com 平澤 綾乃 a.hirasawa@syabi.com

前原 貴子 t.maehara@syabi.com

プレス掲載用に図版データをご用意しています。上記広報担当までお問い合わせください